（別紙３）

公表　事業所における自己評価総括表

○事業所名	スポーツ療育WHISTLE！（ホイッスル）			
○保護者評価実施期間	7年　10月　1日	～	7年　10月　31日	
○保護者評価有効回答数	（対象者数）	25	（回答者数）	15
○従業者評価実施期間	7年　10月　1日	～	7年　10月　31日	
○従業者評価有効回答数	（対象者数）	6	（回答者数）	6
○事業者向け自己評価表作成日	7年　10月　31日			

○ 分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	・屋外に人工芝のコートを備えており、スポーツ療育を行うための環境が整っております。遊びに加えてサッカーや体幹トレーニングなど行う事で、児童らが楽しみながら身体能力や社会性や協調性を育む事が出来ます。	・コーディネーショントレーニングで身体を動かしたり、体幹トレーニングで体幹を強化したり、また活動では遊び心のある内容を取り入れ、児童が意欲的に参加出来る内容を考えております。	・運動による不自然さやぎこちなさが見られた場合は、個別でのトレーニングや協調運動障害（DCD）に対する改善運動など行っていきたいと考えております。
2	・高学年児童という事で、児童が主体的に決めていく事も多く、クッキングなど購入する物なども児童らでの話し合いで決定することで、チャレンジする事や、達成感を味わう機会を多く設けています。	・宇佐南校と合同イベントを行う事で、異年齢児童との交流もあり、その中でどのように接したらよいか、自ら考えて行動できるように活動の中で学べております。またスポーツではルールを教えてくれたり、一緒にやって見せるなどの関わりも増えております。	・地域とのつながりを深めるために、地元スポーツチームや公共施設と連携したイベントを増やし、子どもたちや保護者が一緒に参加出来る場を広げていきます。その中で学べるものがあれば児童たちの成功体験が出来ると考えております。
3	・指導員間で連携を取り、支援開始前後の打ち合わせや振り返りを通して情報を共有しております。またサッカーコーチ経験者の指導員がいることで、サッカーの技術面でのサポートも充実しております。	・余暇の時間を使ってそれぞれの児童にあった目標を設定し、スモールステップでの個別支援を行っております。目標も朝のミーティングで共有することで、色んな角度から児童を見ることが出来ます。昨日できなかった事が今日出来たなどの発見もあります。	・職員だけではなく、保護者の協力や児童のやる気も必要になるため、三者でつながる関係づくりを進めていきます。そのため指導員の質の向上を目指し外部研修を増やし、安心安全でできる運営体制を強化します。

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	・支援記録や個別支援計画の内容に職員ごとの表現の差があり、統一した書き方や観点の整理が今後の課題です。 ・特に、児童の変化や支援の効果を客観的に記録できるよう、様式や記述ルールを明確にする必要があります。	・支援記録や個別支援計画の書き方に差が生じている要因として、職員の経験年数や前職での記録方法の違いがあります。特に、記述の客観性や具体性についての共通理解がまだ十分ではなく、職員間で支援の意図を統一する機会を増やす必要があります。	・職員間で支援記録や計画書の記載方法を統一するため、事例共有や記録の振り返りを定期的に行います。記録様式や評価の観点を明確にし、誰が見ても分かりやすく、児童の成長を継続的に把握できる仕組みづくりを進めます。
2	・地域の児童発達支援センターや自立支援協議会など、外部機関との連携機会が十分とは言えず、地域資源とのつながりを強化する必要があります。 ・情報共有や意見交換の場を増やし、地域全体で支援を行える関係づくりが課題です。	・地域の児童発達支援センターや関係機関との連携が少ない要因として、日々の支援や送迎業務が多忙で外部会議等に参加する時間が限られていることが挙げられます。また、行政や関係機関との情報交換の仕組みが整備途上であり、連携の窓口を明確にしていくことが求められます。	・地域とのつながりを強化するため、児童発達支援センターや学校、相談支援専門員との連絡・情報交換の機会を増やします。自立支援協議会など地域の会議にも積極的に参加し、地域全体で子どもを支える体制づくりに貢献します。
3	・保護者との交流は定期的なお茶会や面談を通じて行っていますが、参加できる家庭に偏りがあり、より多くの保護者が関わりやすい工夫が必要です。 ・時間帯や形式を見直し、家庭と事業所がより一体となって支援できる仕組みを整えることが課題です。	・保護者交流の機会に偏りが見られる要因として、家庭の事情や送迎時間の都合により、参加しやすい時間帯が限られていることが影響しています。情報共有の方法も口頭やLINE、連絡帳など手段が分散しており、参加できなかった保護者にも同様に情報が届く工夫が必要です。	・保護者がより関わりやすくなるよう、交流会やお茶会の開催日時や形式を柔軟に見直します。参加が難しい保護者にはSNSや通信などを通して情報共有を行い、家庭と事業所が同じ方向で子どもを支援できるよう連携を深めていきます。